

青森を代表する夏の夜祭りと言えば、ねぶた、あるいは、ねぶた。

実は、県内各地の20カ所あまりで催されている行事だ。津軽弁で自分たちのねぶたが一番、
という意味の「おらほのねぶた」を知りたくて、3名の著名な制作者のもとを訪ねた。



上：青森のねぶた師、竹浪比呂央氏作の『足柄の公時 頼光に随う』から坂田公時。強い意志を秘めた“睨み”の眼差しに、ぐっと惹きつけられる。下：弘前ねぶたは、扇型の骨組みに武者絵を貼り付けてある。「ねぶた」も「ねぶた」も、もともとのルーツは同じ。時代とともに呼び方が変わってきた。



写真提供：岡協同

高さ4m、横6mの扇型ねぶたを乗せた約80台の山車が、夜の街を練り歩く「弘前ねぶたまつり」。毎年8月1日～7日に開催。掛け声は「ヤーヤドー」。

弘前ねぶたまつり

「弘前のねぶたは、威風堂々。

津軽藩の歴史に連なる

武者絵の迫力と

躍動感がたまらない」

絵師

三浦吞龍

Donryu MIURA

子どもの頃から絵に興味を持ち、地方公務員として働きながら、ねぶた絵を描き続ける。近年は、「弘前ねぶたまつり」の7団体のほか、近隣の市や日本各地のねぶたのためにも作画をしている。昨年まで、津軽のねぶた絵師と鳳絵師でつくる津軽錦絵作家協会の会長。

「昔は職業としてのねぶた絵師はおらず、町内で子どもたちも手伝いながらねぶたを作り、絵の得意な人が武者絵を描いたと言われています。アートでもない、職人技でもない。観る人が『あ、これはいいなあ』と。市民の目が育ててきたのが弘前のねぶた絵です」と弘前を代表する絵師・三浦吞龍氏。

扇型のねぶたは、表側の「鏡絵」に勇壮な武者絵が、裏側の「見送り絵」に幽玄な美人画が描かれている。山車の後ろには笛や太鼓の囃子方が続き、夏の夜に、心に染み入る余韻を残していく。運行には企業や町会単位の団体が参加し、ねぶたの伝統を今に残す。

「夏の農作業の時に眠気を払って、災いや邪気を村の外に流す行事が、ねぶり流し。それを祭りに仕立てたのは、津軽藩の殿様だったのかもしれないですね。最初は素朴な灯籠だったのが、人形型となり、明治に入ってから扇型になった。弘前ねぶたは、昔も今も、絵を観る祭りなんです」

歴史上の合戦に題材を多く求めるねぶた絵は、血飛沫が舞う勧善懲悪のシーンも多く、ぞくぞくするような迫力と幻想的な美しさを放っている。

「昔、江戸からの土産物として持ってきた武者絵を、津軽藩の武士たちが粋だ、カッコいい、と思ったかもしれません。今でも、絵師は下絵を描く時に、北斎や国芳の絵を手本にしています。江戸時代中期に花開いた武者絵の伝統が、津軽の弘前ねぶたに息づいていると言えるかもしれませんね」



毘沙門天の髭を勢よく描く三浦氏。自作アイデアの下絵を参考にし、工房いっばいに広げた和紙に天然の染料とロウを使って、絵を描き込んでいく。「弘前のねぶた絵は、すべて一人で描き上げるのさ。その絵を、各団体が扇型の枠組みに貼り付けて完成するの」。



Katsufumi FUJITA

昭和の時代、町内で子どもたちが集まってねぶたを作った頃から、ねぶた作りに熱中。1986年には、高さ9m、幅12mもの「日本一のねぶた」の制作に携わる。現在は、自宅で弟子と息子と一緒にねぶたを制作。若手からベテランまで18人の絵師が集う「黒石ねぶた師の会」の会長を務める。

黒石ねぶた祭り

「細やかな筆致と色彩が魅力の黒石ねぶた。ねぶたにかける熱い気持ちを若い人に繋げたい」

絵師
藤田克文



人形ねぶたと扇ねぶたが混在する「黒石ねぶた祭り」。囃子方はいるが、弘前と同様に跳入はいない。開催は毎年7月30日～8月5日で、御幸公園から合同運行するのは7月30日と8月2日のみ。掛け声は「ヤーレーヤーレー」。

写真提供：黒石観光協会

青森ねぶた祭

「立体的な造形の美が青森のねぶたの面白さ。伝統を受け継ぎつつも紙と灯り」の可能性を追求する」

ねぶた師
竹浪比呂央

Hiroo TAKENAMI

子どもの頃から独学でねぶたを作りはじめ、20歳でねぶた師に弟子入り。本業のかたわらねぶた師として活動을続け、30年以上にわたり70台あまりの大型ねぶたを制作。2023年、第7代「ねぶた名人」に選出される。「竹浪比呂央ねぶた研究所」を主宰。



上：「竹浪比呂央ねぶた研究所」にて。ここでは、通年でねぶたを制作。下右：「NEBUTA STYLE」として、ねぶたの一片を用いた御朱印帳なども販売。下左：大型ねぶたは高さ約5m、幅約9m、奥行き約7mと巨大。「青森ねぶた祭」は、毎年8月2日～7日の開催。掛け声は「ラッセラー」。

「青森は人形ねぶた、弘前は扇ねぶた。黒石にはその両方のねぶたがあります。合同運行の際に、道幅が狭い『こみせ通り』を通るので、サイズは高さ4・5メートル、幅5メートルと小さめです。観る人がねぶたの近くにいますので、線や柄など細かなところまで繊細に描き込まれているのが、黒石ねぶたの特徴であり、魅力ですね」と藤田氏。

弘前津軽藩の支藩があった黒石には、往時の面影を残す「こみせ通り」が残っている。こみせとは、建物の表通りにアーケードのようなひさしが続く歩行空間。そこを人形や扇型の多彩なねぶたがゆつくりと通る光景は、歴史と格調を感じさせて、独特の風情がある。「黒石の夏には、大人が楽しむ流し踊りの『黒石よされ』があり、ねぶたはどちらかという子どもが楽しむものでした。今でも主催は青年会議所です。ピーク時には80台ものねぶたが出た時もあったけれど、現在では35台ほど。企業参加の数より町内の団体での参加が圧倒的に多く、6月頃には各町内にねぶた小屋が立って、ねぶた好きの人たちが思い思いに作りはじめます」

藤田氏が会長を務める「黒石ねぶた師の会」は、コロナ禍の2021年に、少しばかりの危機感を伴いつつ発足したもの。会員の交流を図りながら絵師としての技術を磨きあい、未来の絵師育成にも取り組もうとしている。

「バカと言われるほどねぶたに熱中する津軽の『もつけ』精神を、若い人たちにも繋げていきたいですね」

夏の宵闇に、勇壮な人形ねぶたを乗せた山車が鮮やかに浮かび上がる。躍動感ある囃子に包まれて、誰もが高揚する気分に満たされる。東北三大祭りにも数えられる「青森ねぶた祭」は、揃いの衣装を纏った跳入が、自由参加できるのも特徴だ。

「ねぶたは、もともと伝統的に県内各地で行われていた民俗行事です。かつての習俗を伝える青森ねぶたと弘前ねぶたが、国の重要無形民俗文化財に指定されています。寺社の神事や祭礼ではないので、誰でも参加できるんです」

竹浪氏は、ねぶたの最高位である「ねぶた大賞」や最優秀制作者賞の常連。立体的な造形美とともに、地域の歴史に根ざす題材を採り入れたねぶた作りでも高い評価を得ている。

「1970年の大阪万博に初めて県外にねぶたを持って行ったら、大ヒット。そこから、当時のねぶた制作者たちが高い意識を持って作るようになったのが、立体的かつ彫刻的で色鮮やかな現代の青森ねぶたに繋がります。伝統の祭りですが、ねぶたそのものは、年々、進化しているのが面白いところでもありますね」

紙と灯りの造形作家としても幅広く活動を続ける竹浪氏。「竹浪比呂央ねぶた研究所」では、後継者の養成にも心血を注いでいる。

「県内はもちろん日本各地に広がるねぶたですが、『やっぱり造形力に魅力のある青森ねぶたがいいね』と未来永劫、思ってもらいたいですね」

「ねぶたの家 ワ・ラッセ」では、著名なねぶた師による作品はもとより、若手の制作者のねぶたも展示されているのが興味深い。毎年、新しい大型ねぶたが見られるのも魅力だ。JR青森駅から徒歩約1分。

年間を通して青森ねぶたの魅力を体感し、その歴史を知ることができるのが、青森市文化観光交流施設「ねぶたの家 ワ・ラッセ」。大型ねぶたが4台展示され、大きなパチで太鼓を叩く囃子体験も人気。



全国各地の知られざる魅力をダイナースクラブの目利き力をもってお届けします。

※「黒石ねぶたのプレミアム体験ツアー」を先行販売中。本誌 80～81 ページをあわせてご覧ください。



ねぶたの家 ワ・ラッセ

住所：青森県青森市安方1-1-1

電話：017-752-1311

営業時間：

9:00～18:00（9月～4月）、

～19:00（5月～8月）

定休日：8月9日、10日、

12月31日、1月1日

料金：大人620円（税込）

